HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	カザフスタンにおける音楽伝承の再編成と音楽学者の役割 : 1970年代以降の展開
Author(s)	東田, 範子
Citation	日本中央アジア学会報, 14, 39-41
Issue Date	2018-07-31
DOI	10.14943/jacas.14.39
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/88347
Type	article
File Information	JB014_009toda.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

カザフスタンにおける音楽伝承の再編成と音楽学者の役割
―― 1970年代以降の展開 ――

東田　範子

本発表では、ポスト・ソビエト期のカザフ伝統音楽界において、「伝統」のあり方が「遺産」として変容してきた過程とその歴史的背景を考察した。

ポスト・ソビエト期のカザフ伝統音楽界には文化復興的な動きが見られたが、その萌芽は1970年代に遡る。そこで重要な役割を担ってきたのは、当時の若きカザフ人音楽学者たちであり、音楽学的研究の発展および応用は、音楽界のあり方に根本的な影響を及ぼしてきた。彼女たちが確立してきた伝承方法とはどのようなものであり、またどのような背景の元で実践されてきたのであろうか。

1930年代に導入された音楽教育のソビエト的近代化により、カザフの伝統音楽と伝承体系にはさまざまな変容が起こった［東田 1999］。その一つは、五線譜の導入である。元来口承で伝えられてきたカザフ音楽は、制度化された音楽教育機関の中で、五線譜によって教育されるようになった。1950年代以降は、読譜と聴音の訓練であるソルフェージュの授業が音楽教育機関に導入され、西洋音楽専攻の学生だけでなく、カザフ音楽専攻の学生にもその履修が課された。

1972年、カザフの弦楽器ドンブラの演奏者兼研究者であったアマノフは、「ドンブラ専攻学生のソルフェージュは民族的概念に基づく独自の内容であるべき」との考えから、ドンブラ・ソルフェージュという科目をアルマティ国立音楽院にて開講した。この科目は、表向きは学生たちの読譜能力を向上するというものであったが、実際は、音楽院における実技教育から取りこぼされていた知識や技術を補完する意味を持っていた。具体的には、地方様式の分析、音楽家たちの系譜の伝承、即興の訓練等が行われ、ソルフェージュという概念を超えた包括的な内容が教えられた。教員は常に音楽学者から選ばれ、ドンブラ・ソルフェージュの授業は演奏専攻の学生と音楽学者の交差する場となった。このことは、後に、演奏家自身が音楽学的視点を獲得していく契機となってゆく。ドンブラ・ソルフェージュは、演奏界においては周縁的な存在でありながらも、音楽教育機関において次第に普及していった。2011年には、「自民族の」という接頭語を冠したエスノソルフェージュ（этносольфеджио）に改名

され、音楽教育機関においてカザフ音楽を専攻する全学生の必修科目に認定されるに至った［Альпеисова 2012］。

もう一つの興味深い事例は、集団教育用に新しく整理された口頭伝承法である。1995 年、上述のエスノソルフェージュを教えてきた音楽学者とドンブラ奏者のラインベルゲノフ夫妻が、アルマティ市に私立学校コキル（Көкіл）を開校した。その独自の理念の一つは、カザフの伝統音楽を、音楽専攻ではない児童たちの必修科目とすること、そして、楽譜を使わず口承でそれを行うことであった。ラインベルゲノフ夫妻は、音楽家のバイボスノヴァと協力して、カザフ音楽を一般児童に教えるための教科書／カリキュラムを考案し、「ムラゲル（Мұрагер бағдарламасы）」と名付けた。「ムラゲル」とは「継承者」を意味する。「ムラゲル」の核心は、民謡や叙事詩、器楽曲などカザフ伝統音楽のさまざまなジャンルを口承で教えることだが、加えて、それらに関する体系的な知識――作者の伝記的情報、地方様式の特徴、各曲にまつわる伝説、楽器の起源と特色など――もまたカバーされており、そこには音楽学的な視野が活かされている。

開校以来、国から援助を得られなかったコキルは、1990 年代末以降のグローバルな文化保護の傾向に機を得て、ソロス財団、ユネスコ、アガ・ハーン財団等から支援を受けることに成功した。そして、現代に口頭伝承を継承する学校として、次第に国際的な注目を浴びるようになった。この流れは、2014 年にカザフの器楽キュイがユネスコの無形文化遺産に認定されたこととも無関係ではないだろう。現在、コキルは一般向けの音楽教室を開校し、一般市民や外国人にも口承でドンブラを教えている。

音楽学者ロンストレムによると、「伝統」がローカル性や失われた古さを志向するのと対照的に、「遺産」は空間・時間に左右されない実践性、典型化・均一化を目指すという［Ronström 2014］。上記二つの伝承･教育方法は､音楽学的観点の介入によってシステマティックな再編成を経たことで、ローカル性を越えた復興的文化の共有を可能にし、遺産としてのカザフ音楽のあり方を方向づけていると考えられる。

これらの伝承方法が、音楽の担い手と受け手にとってどう受容されているのか、また、このような伝承方法が個人の音楽生活にどのような影響を及ぼしているのかについては、今後の現地調査によって明らかにしていきたい。

参考文献

Альпеисова, Г.Т. 2012. *Этносольфеджио в Казахстане: история, теория и практика*. Астана: Мастер По.

Ronström, Owe 2014. “Traditional Music, Heritage Music,” *The Oxford Handbook of Music*. New York:

Oxford University Press, pp. 43-59.

東田範子 1999.「フォークロアからソヴィエト民族文化へ――『カザフ民族音楽』の成立（1920-1942）」『スラヴ研究』46、1-32頁。

（東京藝術大学大学院音楽研究科）